

# 欧 州 雑 見 (その4)

高 橋 武 雄

## 15. パリの研究室回り

11月5日午前9時20分ジュネーブ空港を Air France 機にて出発、10時30分パリの Orly 空港につき、バスにて Invalid に出て、さらにタクシーにて rue du Montparnasse にある Hotel Stanislas に入った。この宿は Düsseldorf への車中知合となった稲垣氏(前出)の紹介されたもので、地下鉄の N. D. des Champs にも、St. Placide にも近く、かつ主人は親日家で英語が通じると共に宿泊料も安価であった。

小憩後 rue de Dantig にある Laboratoire Municipal を訪ねた。次長の Paul Chovin 博士の案内でガス・クロマトグラフィーによる混合炭化水素の分析法、血液中の微量 CO の定量装置、さらに R. Levy 博士の案内で博士の考案になる Jouan-Levy の C. H 定量、N 定量、ハロゲン定量、硫黄定量の各微量定量装置を見た。最後に所長の Prof. H. Moureu 博士に会って暫し歓談した。

翌6日、Montparnasse 駅より郊外電車にて Bellevue 下車 CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique) の研究所を訪ねた。Paul Rumpf 博士の案内で有機化学および物理化学研究室を見学した。

午後快晴なのでVersailleに再遊を試み Grand Trianon にてまたま会ったドイツ人某と共に閑静な庭園を歩いた。美しく黄葉した樹々は秋の日を浴びて黄金色に輝き、この世界無比の美麗な庭園は誠に美の極致を顕現していた。

翌7日、地下鉄にて Miromesnil に出て、Pl. des Saussais にある Compagnie de St. Gobein に有機合成製品部の A. de Vaissiere 博士を訪ねた。この会社は古くからガラスの製造会社として有名であるが、現在広汎なる化学工業を営み、仏国内に 40 余工場、従業員約 6 万を擁している。有機合成では塩化ビニル樹脂、メラミン樹脂等が主であって、硬質塩化ビニル樹脂については東亜合成会社と技術提携しているとのことである。

午後、会社の車にて Paul Quère 博士来り、郊外 Antonio にある有機合成研究所に案内された。まだ新築後 2 年余りの近代的建物で、美事なエアー・コンディションが施工されていて、各室の空気は 6 分間でおき替るとのことであった。化学研究室、微量分析室、X 線廻折装置、可塑性加工工場等を見て、午後 5 時車にて送られ、Luxemburg 公園の近くのパリ大学薬学部教室に Prof. J. E.

Gautier 博士を訪ねた。生憎不在なので、助手の田中元治君(名大工学部)に再度訪問を約してホテルに戻った。

翌8日午前、Odéon にある Jouan 会社を先日会った Levy 博士の紹介で訪ねた。技術部長 M. Mathew 氏の案内で同社の製作販売せる各種分析機器の陳列を見た。この会社は加熱乾燥器 (Oven) と遠心沈降機とが古くは主要製品であったが、最近ではほとんどすべての化学実験機器の製作を行い、自記式分光光度計、電気泳動クロマトグラフ、微量元素分析装置 (Jouan-Levy 式)、融点自動測定器、PH-メーター等独特の技術によるすぐれた製品を出している。さらに Alleray rue にある工場に案内され機械工場、電気組立工場等を見た。



第1図 パリの化学会館における歓迎会

それより車にて rue St. Dominique にある化学会館 (Maison de la Chimie) に正午送られた。館内の明るい事務室や編集室等を参観し、12時半より食堂にて Prof. van Nieuwenberg 博士と私とのための歓迎午餐会が催された。集まるものは化学会館友の会の R. Bienaimé, J. Gérard 両副会長、L. G. Roger (工業化学会分析部会々長) の外、G. Charlot, Cl. Duval, J. A. Gautier の各教授、J. J. Bousquet (工業化学国際会議組織委員会幹事) H. Griffon (警視庁毒物試験所長) の諸氏で、和気藹々の内に世界最高のフランス料理とワイン、葡萄酒の歓待を受けた。宴終つて床に美しい絨氈を敷き壁に支那画を飾ったサロン、Faraday, Davy, Lavoisier 等の肖像画を飾った部屋など、18世紀に建てられ、すぐれた化学者が嘗て集まったことのある歴史的な建物の内を参観した。

帰途 Invalid にある美しい赤大理石でつくられたナポレオンの棺を見物し、ホテルに戻り小憩の後再び化学会館にゆく。Salle 69 にて午後5時半 Roger 博士の開会の

挨拶のあと、私は“Coulometrie Cerimetricque”の題の下に約25分間英語にて講演した。ついで Prof. van Nieuwenburg 博士が“L'analyse chimique de demain”の題で仏語にて約50分間講演した。終って Prof. Gautier 博士の挨拶があって7時閉会となった。聴衆は200名を越えていた。

翌9日朝、田中元治君と共に rue Piere-Curie にある Ecole Nationale Supérieur de Chimie de Paris に Prof. Cl. Duval 博士を訪ねた。教授の長年の研究に成る熱示差分析用の精巧な自記式熱天秤、簡易記録式紫外分光光度計 (A. Jobin & Co., Yvon, Arcueil (Seine)) など独特の装置を見た。さらに rue Vauquelin にある Ecole Supérieure (Municipal) de Chimie et Physique Industrielle に Prof. G. Charlot 博士を訪ねた。ここにて仏国製の分光光度計、定電流装置、定電位装置、クロマトグラフ用分配器、シンチレーションカウンタ等を見た。

午後、Champs Elysees の KLM の事務所にてパリ→ベルリン→ハンブルグの航空手続を了し、ホテルに戻り夕方パリ大学薬学部の Gautier 教授を訪ね、分析化学および有機化学研究室を見学した。田中君の通訳にて歓談して辞去した。

翌10日、あらかじめ本多健一君より連絡せる湯浅年子女士を、College du France に訪ねた。湯浅氏の紹介で原子核化学部主任の Pierre Süe 博士に会い、放射化学研究室を見た。ペーパー・クロマトグラフ、アスベストペーパー融解・クロマトグラフ、Na, K, Cs 等のアルカリ金属の分離法等の研究が行われ、さらに放射化学分析研究室、サイクロترون施設等を見た。

午後、Monmartre の Sacré Cœur 寺院を見物、Pl. de Clichy からさらに地下鉄にて Porte Dauphine に出てブローニュ森 (Boie de Boulogne) の落葉を踏んで散歩した。結局 Cascade まで歩き Bagatelle の前を通過して Pl. de Madrid より Neuilly に出て地下鉄で帰った。

翌11日午前、Tuileries 公園より Vandome, Opera など回って Madeleine 大寺院を見物し、Concorde Pl. に出で、たまたま Grand Palais で開催中の Salon d'Automn を見た。彫刻、工芸品は極めて少く日本の国展に比すれば可成り淋しく感じた。

午後3時バスにて Invalid より Orly 空港に向い、同4時 Air France 機にてパリを去りベルリンに向った。

## 16. 北ドイツの旅

午後5時40分 Frankfurt 空港着、夕食後7時出発、8時半ベルリンの Tempelhof 空港についた。たまたま近藤常通氏 (McGraw-Hill 書店に勤務) に会い、市内バスにて Kurfürsten Damen に出て別れタキシーにて Hotel Pension Viktoria に入った。

翌12日、近藤氏の勧誘で、便利のよい Bleibtreu-Str.

にある Pension Eden に移った。地下鉄にて Dahlem にある Freie Universität に行った。閑静な西郊にあるこの大学の超近代的な建物は、アメリカの Ford Foundation の100万弗をもって建築されたものである。私は少し離れた有機化学教室を訪ねたが Prof. W. Lautsch 博士は生憎不在なので Günter Schulz 博士の案内で放射性同位元素研究室、微量分析室、反流抽出装置、赤外分光計等を見た。さらに Boltzmann str. にある Max Planck Institut を訪ねた。ここは嘗てアムونيا合成法の発明者である Fritz Haber 教授の所長であった電気化学研究所である



第2図 マックス・プランク物理化学研究所 (ベルリン・ダーレム) にて筆者

が、現在ではX線回折法の Prof. Laue 博士が所長であるので、実体は物理学研究所である。たまたま留学中の高良和武博士 (東大教養学部助教授) の案内で Prof. K. Vetter 博士の電解還元機構の研究、I. Brosser 博士の半導体 (CdS, ZnS 等) の研究、Prof. Stranskii 博士のトポレッセンスの研究などを見た。私はここで誠に完備せる工作工場を見て驚嘆した。

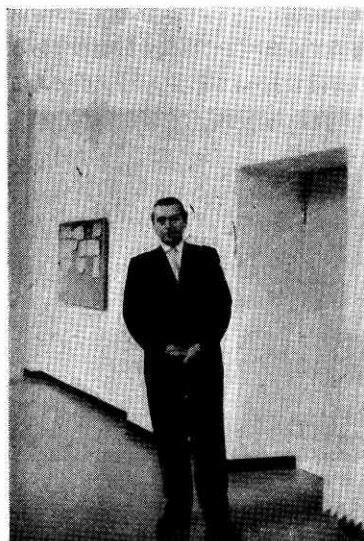


第3図 ベルリン工科大学

翌13日午前、Technische Universität の化学教室を訪ねた。戦災を被った校舎の修復はほとんど内部は新築同然美しい。たまたま学長就任式のため教授全部不在なので、有機化学教室の Hans Griesbach 博士の案内で放射性同位元素研究室、微量分析室、学生実験室などを見た。ここに留学中の前川悦朗君 (名古屋工大) は約1週間前帰国の途についたとのことであった。

午後 Bahnhof Zoo より市電にて Postam Pl. に出で、さらに Brandenburg tor まで歩いた。戦災のままの惨状を呈しているこの地域は東西ドイツの境界で、Tier Garten の若木もほとんど落葉し、誠に寂寥の感が深かった。

午後2時半、再び Techn. Universität に至り、無機化学の Prof. G. Junder 博士を訪ねたが不在であったが、折



第4図 Weygand 教授  
(Berlin 工科大学化学教室)

よく帰室した有機化学の Prof. F. Weygand 博士に会うことができた。教授は石館守三、野副鉄男等の教授とは知己にて、前記の前川君も同教授の下で2ケ年間研究した。

辞して隣りの Hochschule für Bildende Künste Berlin に入つて Karl Hofer 展を見た。19世紀と20世紀と

の過渡期における独特の名画は誠に印象深いものがあった。

Kurfürsten Damm を散歩して夕刻ホテルに戻った。

翌14日午前11時半 BEA 機にて出発し午後12時50分ハムブルグ空港についた。Hamburg HBH 前の Hotel Fürst Bismarck に入つて小憩してから見物に出た。駅近くの Kunsthall に入つて名画の豊富さに驚いた。ことに多数の和蘭画家の作品があり、Corot, Waldmüller の美しい作品もあった。それより美しい人工湖 Aussen Alster の岸を歩いて華麗極まりない市庁 (Rathaus) を眺めさらに Michalis Kirche まで歩いて、電車にてホテルに戻った。

## 17. オランダ、ベルギーの旅

翌15日午前6時45分発の列車にて出発、Bremen を経て Osnabrück にて Hannover より列車に乗り換え、さらに和蘭の Hengelo にて和蘭の列車に移り、午後1時15分 Amsterdam 中央駅についた。駅前の Hotel Victoria に入り小憩してから町の見物に出た。アムステルダムには到るところ運河があり、美しい建物と相和して町そのものが正にすぐれた美術品の様に感ぜられた。Dam Rak, Rokin などの大通りには芸術味豊かな家々が並び、自動車も余り繁くなく、都市の雑音もほとんどない。歩いて

Munt Plein の古い時計塔を仰ぎ無数の運河を渡って、Rijkmuseum の前に出た。堂々たる外観とその内に蔵せる、多数の名画とは正に世界有数の美術館たるのに恥がない。Rembrandt の作品は大作「夜警」を初め20余点、和蘭名画の粋を集めてある。この建物の左半は美術工芸品のコレクションであるが、これまた逸品の多いことは瞠若たらしめる。さらに南にある Stedelijk Museum に入つて数10枚におよぶ van Gogh の作品、その他仏国印象派の多くの作品を見て驚嘆した。

翌16日午前8時11分発の列車にのり、約1時間で Den Haag についた。次の車にて隣りの Delft に9時半につき、歩いて Tech. Hochschule に行き、分析化学教



第5図 ニューウェンベルグ教授  
(オランダ・デルフト工科大学分析化学教室)

室に Prof. van Nieuwenberg 博士を訪ね教授の案内で学生実験室、化学分析研究室、微量分析研究室の外、工作工場、ガラス細工室などを見た。機器分析担当の Prof. P. Karsten 博士、H. L. Kies 博士に会い、さらに Kies 博士に案内されて分光分析、電気分析、光学分析等の誠に完備せる研究室を見学した。この約30年前建築された教室の建物は、誠に快適かつ堅牢につくられていて、デルフト名産のタイルで廊下の壁などが飾られ、誠に落ち着いた感じを与える。分析専修の学生は約100名、質量共に恐らく欧州第一の分析化学教室であろう。正午、教室の近くの Nieuwenburg 教授の宅にて昼食に招待を受け、歓談のあと、午後1時半、夫人の運転せる自動車にて Kipp & Zonen 会社を訪ねた。この会社は創業125年、ガルバノメーターにおいて名高く、現在なお盛んに各種の分析機器をつくっている。ガス分析計、比色計、太陽熱測定器、呼吸中の CO<sub>2</sub> 測定器、炎光光度計、螢光分析計等多数の独特の製品がある。

帰途和蘭独立史に深い関係のある Museum Prinsenhof の古城を見て駅に戻り、再び Den Haag に出で、電車にて Park Hotel に入った。

翌17日朝、電車にのり有名な海水浴場の Scheveningen に出た。豪壮なホテルが海岸に沿って建てられ、北海の波打ち寄す渚は季節外れの今は誠に寂寥であった。再び

電車にて戻り平和宮 (Vreded Palais) に入り、その内部の華麗な部屋部屋を見物した。さらに電車にて Rido 下車、王宮の内庭を通して Mauritshuis に入った。ここでは Rembrandt の傑作「解剖」が出来上ったばかりのように鮮かに美しく見えた。Vermeer, Steen, Ruysdahl, Holbein 等のオランダ名画家の作品はまた光り輝いていた。

午後 2 時発のバリ行急行列車に乗り Rotterdam, Antwerp にて停車したのみで、午後 4 時 Brussel Nord 駅につき、rue Royale にある Hotel Astoria に入った。

翌 18 日午前、市の見物をする。まず Palais de Justice の堂々たる大建築物の前から rue de la Régence を下って Muses Royaux に入り、Roubens, Jordan 等の白国巨匠の作品を見た。さらに王宮の前に出て Parc de Bruxelles の内を歩いた。すでに樹々は完全に落葉したが、静かな晩秋の光は楽しそうに遊ぶ子供達の上に降りそそいでいた。

さらに Gudule の教会に入って壮厳な美しさを感じ、ブラッセルの中心の Grand Hotel Place de Ville についた。広い広場には折柄小鳥の市がたっていた。この広場を囲む家々は黄金色の彩色が施され、殊に市庁と教会とが堂々と相面してその優美さを競っていた。それから Bourse より電車にて Gare du Midi 駅に出て、午後 2 時発の列車にてパリに向った。午後 6 時パリの Gare de Nord 駅につき Hotel Stanislas に戻った。

### 18. 工業化学国際会議 (パリ)

午後 8 時ホテルを出て Concord 広場の夜景を見た。美しい噴水は光で輝き、広場の中央にあるオペリスクの埃及文字は Seine 河の対岸の Palais Bourbon よりもハッキリと判るほどである。

9 時半、Maison de la Chimie にて第 19 回工業化学国際会議のレセプションが開催された。開会に先立って、参加者は各自廊下に列立せる仏国化学界の代表と親しく握手を交した。会場は一階西隈の大広間で、正面には楽壇があり、左右両側のテーブルには、酒、菓子、サンドイッチなどがおかれてあった。ここで私は 5 人の台湾の化学者・実業家に会ったが、日本人は唯私独りであった。広間はほとんど一杯となり、音楽につれてダンスが始り愈々宴酣となったが、旅の疲れのため辞してホテルに戻った。

翌 19 日、Maison de la Chimie の 1 階東の Amphitheatre で会議委員の集合が 9 時から聞かれた。今回の国際会議には同時に腐蝕に関する欧州会議が合わせて開催されたので、10 時半より合同の開会式があり、ついで J. C. Hudson 博士の「British Iron & Steel Research-Association における腐蝕の研究」なる講演があった。午後秋晴の好日なので Seine 河岸の Trocadero に出て

Chaillet 宮より、Pont D'Iena を渡ってエッフェル塔 (Tour Eiffel) の下に出で、緑の芝生の Parc de Champ de Mars を散歩し、さらに Museum Rodin に午後 1 時開場を待って入った。美しい緑の蔭の繁った旧教会の中にあるロダンの作品、旧邸内の美しい小さな作品を見、また静かな庭園の中を歩いて巨匠のありし日を偲んだ。午後 2 時 Bastille の広場に出た。フランス革命の狼火を上げた記念の地は、今日では自動車の交通が繁く、ただ中央に金色輝く自由の天使の像が高く聳えていた。Pl. des Vosges に出て文豪ビクトル・ユーゴーの家を訪ね、さらに St. Louis 島を歩いて Notre Dame 寺の内に入り、さらに Conciergerie に入って地下のマリア・アントアネット皇后の籠居の部屋を見た。

翌 20 日、Maison de la Chimie において研究発表をきいた。日本の学会の年会と同様、図表を示すのに、紙やスライドが用いられ、談話型、朗読型等さまざまであった。11 時半より大講堂で CNRS の太陽エネルギー研究所長 Prof. Felix Trombe 博士の「太陽熱とその工業的利用」の講演をきいた。多数の美しいスライドを用いていた。午後 2 時半見学バスにのり、Invalid Promenade を出発し Seine 河下流の Malmaison-Rueil にある石油研究所 (L'Institut Français du Pétrol, des Carburants et Lubricants) に 3 時 20 分到着した。美しい緑の庭に大樹が繁っている内に点々と新しい研究所の建物が立っていた。分析研究室においては X 線回折、電子顕微鏡、ガス・クロマトグラフ、熱示差分析計、自記式赤外分光計等を見た。ついで内燃機関の研究室にて燃焼の研究、油量調整機等を見、さらに石油化学の研究室においてクラッキング、レフォーミング、酸化等の化学反応の中間試験設備を見、終って本館 2 階の会議室で葡萄酒、菓子等の歓待があった。

翌 21 日午前、Montparnasse 駅前より Rue de Renne を下って、St. Sulpice 寺、St. Germain des Pres 寺を見物し、St. Germain 通りを歩いて Maison de la Chimie に至り、研究発表をきいた。

午後 2 時半、見学バスにて Seine 河下流の Bougival



第 6 図 パリ郊外の鉄鋼研究所平頭入口



の美しい風景を見て、St. Germain-en-laye にある鉄鋼研究所 (Laboratoire de l'Institut de Recherche de la Sidérurgie) に3時半到着した。静かな林の丘の上に立つこの近代的建物の中に金属表面の凹凸測定装置 (Micro-analyseur a Sonde Electronique, ONERA)、鉄の熱磁気測定装置、特種微量天秤、電子顕微鏡、電子線回折等の最新設備をもつ物理部門を見た。また化学部門では非鉄成分分析用のポーラログラフ、鉄鋼中の微量ガス分析装置 (真空熔融法) などを見、さらに中間試験工場にて多数の高周波炉、鍛造機、圧延機等を参観した。

午後8時半よりオペラ国立劇場における招待に、本多健一君と共に出席した。絢爛たる観覧席には美しく着飾った正装の男女が満ち、豪華なるステージでは世界最高の美しいバレエが演ぜられた。

翌22日午前の研究発表において、私は「日本におけるポーラログラフ最近の進歩」について約15分間スライドを用いて英語にて講演した。座長は Prof. Cl. Duval 博士であった。



第7図 化学博覧会場 (パリ)

午後南部の Port Versaillesにある Parc de Expositions に開かれた化学博覧会 (Salon de la Chimie) に行った。まず東棟に入ってその陳列場の広大なることに驚いた。ここでは世界各国の光学および電気的分析装置が出ていて大変よき参考となった。広い陳列会場の中を歩き廻って6時半閉場と共に出了。

翌23日午前、Maison de la Chimie にて Journée Americaine の講演をきいた。R. S. Aries 博士の「化学的製法に関する国際的許諾」の講演において日本の世界各国との技術提携について述べていた。

午後2時半見学バスにて Invalid Promenade を出発、3時20分 Saclay の原子力研究所 (le Centre d'etudes nucléaires de Saclay) に到着した。冶金化学研究室においてアルミニウムおよびその合金の高熱下の水蒸気による腐蝕の研究、金属中の微量ガス分析装置などを見たあと、バスにて所内の各建物を外より見た。結局原子炉等を参観することができなかった。

24日朝より再び化学博覧会場に入って、1昨日見残した東棟ならびに西棟の陳列を見た。この博覧会においてプラスチック関係の出品が極めて多数であり、ポリウレタン、その他のポリエステル樹脂の進出が目ざましく思われた。私はまたここにて、アルギン酸製造会社、Alginate Maton Frères と Société Bretonne de Produits Chimiques et Pharmaceutiques の2社の出品を見たことは予想外の収穫であった。

正に百花繚乱たる陳列場を見聞し、午後5時退場するまで、誠に有益な一日であった。

翌25日、パリの最後の日を本多健一君と共に観光バスにて Barbizon, Fontainebleau の秋の行楽に過ごした。

翌26日午後12時半、Alitalia 機にてパリを立ち、白雪皚々たるアルプスの山嶺を越えて午後3時、永遠の都ローマの Ciampino 空港に安着し、テルミ中央駅近くの Hotel Massimo D'Azeglion に入った。

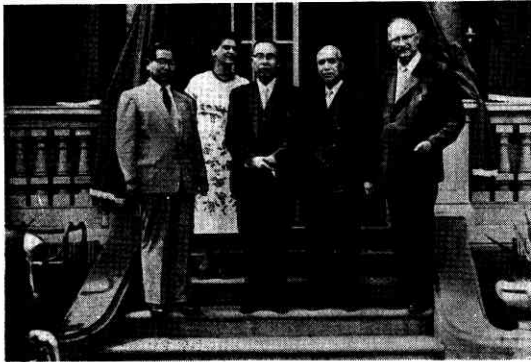
## 19. イタリアの旅

8月26日オーストリアの Innsbruck より Brunner 峠を越えて、私は午後4時 Bressanone-Brix についた。その夜は Elefant Hotel に入り、翌27日午後のひとときを、その郊外の Novacella のレストランにパトバ大学の教授諸君から招待されて、北伊の快い夏の空気の中に過ごした。

午後6時半より Prof. Semerano 博士の挨拶について私は約1時間「日本におけるポーラログラフ装置の進歩」(英語)について講演した。聴講者約50名、ついでドイツのエナ大学の H. Berg 博士がポーラログラフの創始者 Heyrovsky 教授の近況をカラー・スライドにて説明した。

さらに28日汽車にて午前9時 Bressanone を出発し午後2時半 Milano 中央駅に到着、駅近くの Hotel Florida に投宿した。翌29日、ミラノの西方約1時間の車程にある Novala にゆき Montecatini 会社の中央研究所 (Istituto Ricerche "G. Donegani") を訪ねた。極めて快適なエアー・コンディショニングの施された研究室には、最新の物理または物理化学に関するあらゆる測定装置が完備され、流石世界有数の大化学工業会社の活動の根源であると感じた。正午は、副社長、研究所長の G. Fauser 博士の私邸にたまたま来所中の日本水素工業会社取締役山田信四郎氏他社員2名と共に招待され、豪華な邸内でイタリア最高の料理を満喫した。Fauser 博士はアムモニア合成における Fauser 法の発明者として世界的なエンジニアであって、その書斎の壁一面にファウザー法による合成アムモニア工場の写真が多数飾られていた。

翌30日にはミラノの有名な大理石の美しい大寺院 (Duomo)、中世紀の古城 Castello Sforzesco、古寺 St.



第 8 図 Fauser 博士邸玄関にて  
(右方より Fuaser 博士, 山田氏, 筆者, Fauser 夫人)

Ambrogio, 文芸復興時代の多数の名画を蔵している Pinacoteca di Brera および Palazzo dell' Ambrosiana などを見物し, あるいは極めて多数のすぐれた陳列品をもって有名な科学博物館, 近代美術館などを訪ねた。

翌 31 日, Como 駅よりコモ湖を渡って Bellagio に出て, 美しい湖畔の Villa Melzi, Villa Giulia などを訪ねてコモ湖の山水の美しさを賞観した。午後 4 時発の列車にて瑞西に向ったが, Lugano より St. Gotthard 峠に至る雄大な景観は誠に感銘深いものがあった。

私はさらにその後欧州各国を回遊してから滞欧最後の一週間を中部イタリアで送った。11 月 26 日午後 12 時 25 分バリの Orly 空港より Alitalia 機にのり, 途中皚々たる白雪輝くアルプスの山々を脚下に眺めて午後 3 時ローマの Ciampino 空港についた。Terme 中央駅近くの Hotel Massimo D'Azeglio に投宿した。



第 9 図 ローマ・ベネチア広場  
(左の騎馬像は Victor Emanuele II)

27, 28 の両日はローマの観光に過ごした。駅前の Diocletianus 帝の大浴場の廃墟につくられた Museo delle Terme にある美しい古ローマのモザイク, ヴィナス, アポロの美しい大理石の彫刻等, 国立美術館 (Palazzo Barberini-Ingresso) にあるラファエロ, チチ

アノ, ホールバイン等の名画, ローマ旧教の大本山 St. Pietro 寺の裏にある Musei Vaticani の金色燦爛たる大図書室, ミケランジェロの壁画で有名な Cappella Sistina 礼拝堂, ラファエロの美しい壁画のある Stanza 等誠に印象深いものであった。

翌 29 日午前 8 時 80 分ローマ発の列車にて午後 0 時半 Firenze 駅についた。文芸復興の魁となったこの古都にある Uffizi と Palazzo Pitti との両美術館はその美しい名画を多数蔵せることにおいて驚嘆せしむる。San Lorenzo 寺内のメジチ家礼拝堂に飾られたミケランジェロの彫刻の美しさ, 大寺院 (Duomo) の白と濃青との大理石でつくられたモザイクの美しさ, 静かに流れるアルノ河の碧き美しさなど思い出が深い。

12 月 1 日, Firenze より列車にて Pisa につき, 駅前よりバスにて有名な斜塔 (Campanile) のある寺院を訪ねた。塔上に立って美しいピサの町を眺め, すでに白雪を戴いたアペニンの山々を望んだ。正午列車にてピサより西海岸に沿って美しい地中海の水を眺めつつ, 午後 4 時ローマに戻り, さらに 5 時再び乗車して南下し午後 7 時 50 分ナポリ中央駅につき, 駅前の Hotel Cavour に入った。

翌 2 日, 電車にて Pompei の古い廃墟を訪ねて, さらにナポリの町を見物し午後 4 時発の列車にて 7 時 10 分ローマ中央駅に到着し, 再び元の Hotel に入った。

3 日, Victor Emanuele II の記念堂, Borghese 公園などを散歩し, Museo Borghese の内にあるラファエロ, ボッチェリー, チチアノ等の名画, Bernini の美しい彫刻などを見た。

## 20. 帰 国

夕方 Terme 駅構内の KLM ターミナルに至り, 待つこと 3 時間余, 漸く午後 9 時バスにて出発, 10 時 25 分 KLM 機はローマを離れた。折柄のスエズ運河紛争のため機はカイロ経由を変更し, 翌 4 日午前 8 時, 灼熱の太陽輝くスーダンの Khartum 空港についた。9 時出発, 広漠荒涼たるアラビア砂漠の上を飛んで午後 9 時半 Karachi 着, 11 時出航, 以後 Calcutta を経て 5 日午前 10 時半 Bangkok 到着, KLK レストハウスにて休憩し, 午後 5 時出航し, 11 時半 Manila 到着, 翌 6 日午前 0 時半 Manila 発, 8 時 20 分羽田着, 懐しい母国の地を踏むことができた。(終) (1957. 6. 14)

## 追記:

この訪欧旅行の機会を与えられた日本学術会議並びに日本分析化学会, また滞欧中の費用に関し御後援を戴いた諸会社団体に対してここに厚く御礼を申し上げます。